

北海道新聞 2011 年 3 月 27 日（日）

<脳障害の少女 避難所生活>

周囲の理解が支え 札幌のNPO援助

東日本大震災から2週間が過ぎ、長引く避難生活で衰弱が目立つ障害者ら「災害弱者」を支援する動きが広がってきた。重度障害者が地域住民に支えられて避難所生活を送り、認知症の高齢者らを対象にした避難所設置も進む。災害弱者の命をどう守るのか。札幌のNPO法人も加わり、試行錯誤が続く。

「障害を理解してくれる町内会の人たちのおかげで、避難所でも暮らしていける」

宮城県石巻市の湊小学校に設けられた避難所。震災で自宅が半壊状態となった市内の主婦伊勢理加さん（43）は重い脳障害で四肢にまひがある三女の知那子さん（14）との避難所生活で、地域住民への感謝を新たにした。

たんの吸引など24時間態勢の介助が必要な知那子さんは、震災直後にヘリコプターで市内の病院に運ばれたが、病院は重傷者であふれ、「とても対応できない」と戻された。

現在は教室の3分の1ほどの広さの相談室で23人が共同生活を送る。当初は毛布もなく、校舎のカーテンや運動会で使う大漁旗にくるまって寒さをしのいだり、周りの人が知那子さんに多めに分けてくれた。



「避難所生活がんばったね」。三女の知那子さん（手前）に話しかける伊勢理加さん（中川明紀撮影）

同じ部屋の住民は普段から付き合いのある町内会の人たち。障害への理解もあり、深夜のたん吸引機の音にも嫌な顔をしなかった。伊勢さんの車は流され、避難所生活の長期化を覚悟していたが、被災地に入っていた札幌市のNPO法人「ホップ」の手助けを受け、29日には石巻市内の伊勢さんの実家に移ることができる。

避難所では障害児を抱える親が孤立するケースが多く、伊勢さんは「たまたま地域の人や札幌のボランティアの協力があって、娘の命をつないでくれた。そうでなければ、どうなっていたか」と振り返る。

ホップのメンバーで、知那子さんの移送を担当する滝桃子さん（28）は、「障害者の人たちに支援がまだまだ行き届いていないのが現状。少しでも手厚く支援したい」と話した。

一方、石巻市が体育文化施設「遊楽館」に設置した「福祉避難所」では、高齢者約120人が暮らす。半数以上が認知症や人工透析患者ら介助が必要な人たちで、医師や看護師が常駐し、避難生活を見守っている。

高血圧で難聴の女性（70）は人工透析が必要な夫（75）と避難生活を送っており、「夫は避難所から透析できる病院に送迎してもらっている。暖房もきいていて暖かい」と安心した様子だ。

ただ、スタッフ不足は深刻だ。1人で10人以上の高齢者に対応し、看護師の1人は過労で倒れた。不休で働く医師赤井健次郎さん（52）は「行政は弱者対策をはじめ、あらゆることで後手に回っている」と支援の充実を訴える。

（報道本部 徳永仁、経済部 河相宏史）